

# 日本中国語学会々報 2010年12月

<http://www.chilin.jp/>

## ◆目次◆

ご挨拶.....	1
2010 年度全国大会総括.....	2
2010 年度学会奨励賞の選考経緯.....	3
支部例会実施報告 2010. 6-2010. 12.....	5
内規の改正と会則の改定のお知らせ.....	11
会議報告.....	12
例会および全国大会開催のお知らせ.....	19
事務局からのお知らせ.....	19

## ご挨拶

平田昌司（日本中国語学会会長）

第 60 回記念大会は、11 月 13 日・14 日の両日にわたって神奈川大学横浜キャンパスをお借りして開催されました。遠路を来日された孫朝奮・Jerome Packard・鄒崇理の三先生の講演、会員の口頭発表 57、ポスター発表 7 という盛況で、成功裡に閉幕できたことを喜びたいと思います。あいにく同じ横浜でひらかれた APEC 首脳会議と同じ日程となったため、加藤宏紀代表、松村文芳会員をはじめとする大会準備会スタッフ、および全国大会運営委員会には、例年以上のご心労をおかけしました。『中国語学』257 号、会員名簿も大会にあわせて無事刊行されています。大会に関係されたすべての方々に感謝いたします。

学会の中心的な学術活動を支えていただいている全国大会運営委員会・編集委員会ともに、本大会開催にあわせて委員長・委員の交代がありました。旧委員のみなさま、ほんとうにご苦労さまでした。また 2 年間ご負担を

おかけする新委員のみなさま、どうかよろしくお願いいたします。

さて、理事会・評議会・総会では、次回選挙における理事の選出方法など、いくつかの重要事項を決定しています。別にご報告しており、2011 年度から、本学会の会員管理を中西印刷株式会社に委託することとなりました。それともなつて、来年 6 月（予定）から本学会は WEB 会員管理システムを導入し、全会員に ID とパスワードを付与することで、連絡先・所属などの変更、会費払込の受付状況確認などを、コンピュータネットワークを通じておこなえるようになります。従来方式での諸手続き受付も可能ですが、全体としては大きな転換になりますので、事務局からの今後のお知らせにご注意ください。今年度まで長きにわたって会員管理をお願いしてきたビッグウェーブ情報開発の菊地一雄代表には、たいへんお世話になりました。この場を借りて

お礼申し上げます。

少し先のことになりますが、2016年に本学会は前身の中国語学研究会設立からかぞえて70周年を迎えます。理事会を中心として、ふ

さわしい記念活動の検討作業を今後おこなっていくことといたしました。あわせてご報告しておきます。

2010年11月30日

## 2010年度全国大会総括

### I. 今年度大会総括

第60回全国大会は、神奈川大学を会場として、11月13日、14日に開催された

#### (1) 参加者数

本大会は、筑波大学で開催された第55回大会以来5年ぶりの首都圏開催となり、多数の参加者があった。総数420名、内訳：事前登録者256名、当日参加者111名、書籍等の展示関係者53名である。

#### (2) 総評

学会の歴史の中で節目となる第60回大会を迎え、“記念大会”と位置づけて準備に取り組んだ。開催校神奈川大学によって、初日のシンポジウム「中国言語学の新潮流」が企画され、歴史文法、現代語形態論、論理言語学の各領域で活躍中の3人の海外研究者による講演が行われた。テーマが総花的であるという声も聞かれたが、記念大会という性格上、多数の会員に興味をもっていていただく領域や従来手薄であった領域を選んだ結果である。アメリカからの講演者招聘も5年ぶりのことであったが、そのために学会から記念大会のための積立金の一部を充当していただいた。

運営面では、加藤宏紀代表、松村文芳運営委員を中心とした神奈川大学の準備会のご尽力に敬意を表したい。学生スタッフの動員数は近年では最多であったと思われるが、中心メンバーは数名の院生であり、黙々とそれぞ

れの役割をこなしていた。運営委員会から2名が受付業務の支援に当たったが、分科会・ポスターセッションを除く実務部分はすべて準備会が担当した。また、例年のことながら、ビッグウェーブ情報開発社の菊地一雄代表には、大会受付をはじめ、懇親会の受付に至るまで、実質的なディレクターとしてご協力をいただいた。過去10年にわたるご尽力と併せて衷心より感謝申し上げたい。

ポスターセッションは、昨年も多数の参加者（来聴者）があったが、今年はそれ以上の盛況振りであった。口頭発表から回ったある発表者は、「ポスターで実質的な議論ができて本当によかったです」と言って下さった。

二日目の分科会は整然と実施された。トラブルは報告されていない。

#### (3) 反省点、改善点

■大会プログラムは『中国語学』に掲載されるため、例年9月初旬までには原稿が印刷所に送られる。また『予稿集』は大会開催日の10日ほど前までには印刷所に送られる。今年は例年より2週間遅れの開催となったためその分余裕があったが、次の二つの問題が発生した。

##### ①直前のキャンセル

##### ②著者の追加、論文タイトルの変更

①についてはやむをえない面もあるが、8月末までに申し出があれば、不採択となった論文で補充するなど、プログラムの調整が可能で

あるので、早めに運営委員会まで申し出ていただきたい。②については、『中国語学』と『予稿集』で著者やタイトルが異なることになるので、申込時のものを変更することは原則認めていない。やむをえず変更する場合は、8月末までに理由を添付の上運営委員会に申し出ていただきたい。今大会では『予稿集』の校正段階で明らかとなった無断変更が3件あり、それぞれ理由書をご提出いただいた上で変更を認めた。

■複数の著者の連名論文の場合、第1著者が急病などで発表が不可能となった場合は、他の著者による発表が可能である。ただし、1人が複数の論文に名前を連ねることが徐々に増えている現状に鑑み、ある論文の第1著者が他の論文の第2著者として発表することは不許可とした。

■分科会（口頭発表）の会場は、1フロアに集められ、コンパクトに配置することができた。またプロジェクターの事前動作チェックは入念に行うことができた。

■6つの分科会会場には、それぞれ1-2名の運営委員を配置し、司会者と連携してスムーズな進行を図った。

■昨年、追加資料の配布・提示に関して、司会者の承諾を得ずに配布するなどのケースが

あったが、今年は開会式でこの点の注意を喚起することで混乱はなかった。追加資料の配布・提示は原則禁止ではあるが、やむをえない場合は発表前に司会者又は運営委員に許可を求めることを今後も徹底したい。

■海外会員の参加登録手続はスムーズに行われた。毎年のように参加していただいている海外会員も少なくなく、本会の大会に慣れてきた面もあろう。プロジェクターの事前動作チェックやポスターセッションの準備作業等についても、積極的にご協力をいただいた。

## II. 来年度の全国大会にむけて

(1) 来年度の第61回大会は10月29、30日の両日、松山大学で開催する。

(2) 学会業務委託先の変更に伴い、大会準備・運営の方法については、しばらくは運営委員会と開催校準備会が連携しながら、試行錯誤で進めざるを得ない。来年度の大会で一定の方式を確立する必要がある。

(大会運営委員会)

## 2010年度学会奨励賞の選考経緯

編集委員会では、今年3月の第1回編集委員会において、『中国語学』256号に掲載された論文の中から学会奨励賞の選考対象とする論文3本を選出し、さらに5月に開かれた第2回編集委員会において、選考対象論文3本について慎重な協議を行なった結果、以下の論文2篇を2010年度の学会奨励賞受賞論文の候

補とすることに決定し、この案が理事会において承認されました。

学会奨励賞受賞論文（著者名アルファベット順）

(I) 論題：浙江省嵊州方言の一次的動詞をめぐって

著者：陳薇（東京大学総合文化研究科・大学院）

(II) 論題：論題：上古中国語音韻体系に於ける T-type/L-type 声母について  
——楚地出土竹簡を中心に——

著者：野原将揮（早稲田大学大学院文学研究科・大学院）

【選考の経緯】

(I) 受賞論文は、Zeno Vendler 1967 で提示された英語の動詞に関する四分類を理論的背景とし、浙江省の嵊州方言を研究対象として、中国語における動詞分類の基準と分類項の設定について新たな提案を試みたものである。考察の結果、嵊州方言には、結果を含意しない瞬間的な行為を表す「一回的動詞」という一類が存在し、それは Vendler の分類における「活動動詞」とは異なるタイプとして認められること、また、共通語（普通話）においては逆に「活動動詞」と「一回的動詞」を明確に区別する形態的特徴が見られないことが明らかになった。

注音法や専門用語の使用について若干の不備が見られ、また先行研究の動詞分類に対する議論と検証がやや不足しているという意見もあったが、文法的な振る舞いに着目したデータのテスト、および分析に用いた用例がいずれも適切であると認められ、方言文法研究に新たな境地を開く可能性を提示したことが高い評価を受けた。

今後はこの姿勢を保持しながら、中国語文法の普遍性と多様性の解明に寄与する研究を期待する。

(II) 受賞論文は、上古漢語の舌音声母が諧声符の分布から T-type と L-type の二系列に分かちうるというプーリーブランク以来の仮

説を取り上げ、特に戦国時代後期の楚地域の出土資料によってその妥当性を検証したものである。その上に立って、伝世文献では T-type か L-type か判定することができない幾つかの具体的な文字の声母を楚簡の諧声符によって決定するなど、出土資料の特性を十分に生かした研究手法が評価された。文章の整理が行き届いていないこと、例外の扱いにやや慎重さを欠くことなどの問題点も指摘されたが、本論文の手法が、出土資料による上古音学説の精密化という今後のあるべき方向と合致していることが考慮され、受賞に値すると判断された。二千年にわたって読み継がれてきた伝世資料と異なって、出土資料には後世の手垢が付かない魅力とともに、予想外の揺らぎやゆがみという生の資料ならではの怖さも同居していることもあり得る。そのことを念頭に、研究の奥行きを深めるべく研鑽をつむことを期待する。

~~~~~

本年も昨年に引き続き、2 篇の同時受賞となりました。編集委員会における協議では、受賞した 2 篇の論文についての評価が非常に拮抗しており、甲乙を付けがたい状況にありました。2 篇が異なる分野の論文であり、それぞれの研究領域における学術貢献の点においても、どちらか 1 編に絞ることは極めて難しいという結論に達し、今年度も 2 篇の論文を奨励賞候補とすることになりました。

(編集委員会)

## 支部例会実施報告 2010.6-2010.12

## ◆関東支部例会

◇2010年6月19日(土) 慶應義塾大学

- ・李菲(慶應義塾大学・院):『獲得』を表す“V着 zháo”と“V到”

“V着 zháo”と“V到”はともに、「動作主がある動作によって何らかのモノを手に入れる」という「獲得」の事態を表すことができるが、両者の大きな違いとして、“V着 zháo”の方が北方方言的、口語的であることが一般にいわれている。しかし、成戸1999、叶南2003などから、両者は表現機能の上でも様々な違いをもつことが分かった。本発表はこれらの先行文献をふまえて、“找”“买”などの動詞からなる“V着 zháo”と“V到”を中心に、両者が用いられる際の文脈や構文上の違いについて考察を行う。そこから、“V着 zháo”が“V到”よりも「ターゲットとなるモノを獲得した」という事態を表すのに用いられることが多いと結論づける。

- ・橋本陽介(慶應義塾大学・院):現代中国語の『是』の指示代名詞性について

現代中国語の「是」は通常、英語のbe動詞に類するコピュラと考えられるが、強調の「是」といわれるものや「是～的」構文、「是」を含む副詞と考えられるものなど、統一的な解釈は容易ではない。本論では現代中国語における「是」のコアの意味を「それに先立つ要素A(Aは語、文、あるいは前提となる状況)を指示してとりたて、以下にそれを判断・説明する要素Bを導入する。多くの場合「是」は形式的な主題、あるいは主語であり、要素Bは直接的にはAではなく「是」を説明している。」と規定し、「是～的」構文や「是」を含む副詞等の統一的な説明を行う。

- ・高橋康徳(東京外国語大学(院)・日本学術振興会特別研究員):中国語無軽声2音節語の語ストレスに関する聴覚実験

本研究では聴覚音声学的なアプローチを用いて中国語の語ストレス構造を考察する。音韻論の枠組みでは軽声がストレスの弱い音節であることは受け入れられているが、軽声を含まない語では、(1)ストレスの対立が存在するという解釈と(2)ストレスの対立は存在しないという解釈の両方が主張されており、どちらがより妥当な解釈であるかは未解決の問題である。そこで、本研究は無軽声2音節語を対象に聴覚実験を行った。結果として、(1)前後どちらかの音節にストレス知覚は偏らず、(2)被験者間で回答が一致する傾向も弱く、(3)声調がストレス知覚に影響を与えることが確認された。これらの結果は軽声以外のストレスの対立は存在しないという解釈を支持する。

◇2010年9月25日(土) 日本大学

- ・今村圭(筑波大学・院):『水滸伝』に見られる使役表現について

現代漢語と同様に、近代漢語でも、兼語式“V(使役動詞)+O(兼語)+VP(動詞フレーズ)”を用いて使役を表している。これまでの研究では、個々の使役動詞に対する歴史的変遷の研究は多く行われているが、それに比べ、一つの作品におけるそれぞれの使役動詞の用法を分析したものは少ない。本発表では、明代の代表的な作品である『水滸伝』を対象とし、兼語式“V+O+VP”のVPに着目して、それぞれの使役動詞を分析する。また、兼語をともなっていない“V+VP”という形式に対しても、この形式がどのような場合に成り立ちやすいのかを分析する。

- ・ 神野智久（大東文化大学・院）：“了”とコンテキスト-日本語の補助動詞「テキタ」を例に-

“他已经来了。”は、日本語では「彼はもう来た」や「彼はもう来ている」と訳せる。また、“他快要来了。”は「彼はもうすぐ来る」とも訳せる。これらの言語現象から、副詞（“已经”“快要”）と呼応して“了”が意味変化を起こしている、と言える。さらに、刘勗宁は、“V了”形式が「実現」でなく「完了」を表すと理解するためには、動詞の性質の他にも、“吃了就走”のようなコンテキストが必要となる、と指摘している。これらから“了”がコンテキストによっても意味変化を起こすことがわかり、その変化が日本語訳にも現れる。これらの言語現象をもとにし、本発表では、コンテキストと呼応した“了”が、「努力してきた」のように、時間的移動を表す日本語の補助動詞「テキタ」と訳せる場合があることを明らかにする。

- ・ 野原将揮（早稲田大学・院）：書母に関する初歩的研究～出土資料から分かること～

書母には幾つか由来があり、後の音変化によって合流したと考えられている。この点はすでに定説となっているが、先行研究では再構音など一部に見解の不一致が見られる。たとえば「書」は『説文解字』によると「者声」とのことであるが、鄭張尚芳2003（『上古音系』上海教育出版社）によると\*hljaとある。諧声系列によれば、「者声」の文字は T-type 声母であるから、「書」も T-type と考えるのが良いと思われる。Baxter1992（*A Handbook of Old Chinese Phonology*）でも\*stjaと再構される。本発表は諧声系列を再確認し、出土資料中の通仮例から書母の由来に関して考察を加えることを目的とする。また書母の時代変遷についても考えてみたい。

#### ◆東海支部例会

◇2010年11月27日（土）名古屋大学

- ・ 丸尾 誠（名古屋大学）：中国語の動補構造“V回（来／去）”について

“V回（来／去）”フレーズにおける移動主体に着目すると、(i) Sの移動（例：走回来）、(ii) Oの移動（例：放回去）、(iii) S+Oの移動（例：运回来）のようなパターンがみられる。ただし、(iii)のタイプ“买回来”では、Oが「元の場所に戻る」わけではない。また“一斤黄豆可以换回两斤豆腐”のような例では「戻ってくるもの」が異なっている。荒川2005はOの移動を表す“寄回来（／去）”を扱ったものであるが、本発表ではそれ以外の(ii)のタイプおよび(i)(iii)のタイプも含めて、中国語では『同じもの』が『元の場所』に戻る」という意味を表すものではない状況に“V回”の形が広く用いられる事象を概観しつつ、その動機づけの探求を試みる。

- ・ 韓涛（名古屋大学・院）：中国語における〈好まれる言い回し〉としての事態把握について—整列対応に基づく方向補語の用法を例に—

言語が異なれば〈好まれる言い回し〉も異なる。例えば“小李一生下来就非常聪明。”[李さんは生まれたときから頭がいい。]という文が示すように、日本語訳と比較して、方向補語を用いた表現が中国語話者にとって〈好まれる言い回し〉であるといえる。このとき、“下”は〈現実世界〉と対応し、“来”は認知主体が〈現実世界〉の内側から問題の事態を眺め、言語化していることをそれぞれ表している。本発表では中国語話者にとってのこのような〈好まれる言い回し〉としての事態把握の仕方について、鍋島2009で提案された整列対応（アラインメント）という観点から考察する。

・勝川裕子（名古屋大学）：“他很会开车。”の成立可否について

現代中国語における助動詞“会”に「～するのが上手い／～に長けている」という用法があることは周知の事実であり、辞書等でも「可能」を表す“会”とは別に項目を立てて、説明されることが多い。本発表では、「可能」を表す“会”から「上手い」という意味が派生するプロセスについて考察する。また、これまで“开车，骑马”のような技能型については「{運転／乗馬}が上手い」の意味で“很会～”と共起することはないとされてきたが、実際にはこのような表現例が散見される。どのような動作行為が“会”と共起し「上手い」を表すのかについて考察しながら、“会”がもつ根本的な表現意図を探っていく。

・謝平（名古屋大学国際言語文化研究科博士候補研究員）：“比”構文における“还”，“更”と補語の共起関係について

“还”と“更”はいずれも程度が増すことを表し、互いに置き換えられる場合も少なくない。しかし，“还”は数量補語以外にも程度補語“多”と共起するものの，“更”は“一点”，“一些”のような不定数量補語と共起する以外、他の補語とは殆ど共起しない。本発表では意味論の観点から“还”と“更”の基本義を考察した上で，“更”が数量・程度補語と共起しにくいという現象が、「程度差が大きい」ことを表すという“更”の持つ特徴に起因するものであることを論証する。また、このような制約の存在しない“还”については“更”と異なり、それ自体では程度差を表す機能を持たないことについても指摘する。

◆関西支部例会

◇2010年7月11日（日）関西大学千里山キャンパス

・大岩本幸次（大阪市立大学）：南宋・祝泌「声音韻譜」について

「声音韻譜」は南宋の祝泌が編纂した音節総表いわゆる韻図の一種である。韻図は韻書の音注を読む参考書として唐代には登場していたとされるが、広く士大夫に重んぜられる所とはならなかったとみえ伝存する例は多くない。幸い「声音韻譜」は祝泌の『観物篇解』に付録する『皇極経世解起数訣』に継承され、今に宋代韻図の姿を伝える貴重な資料となっている。またその字音体系は当時の言語音を反映するとの指摘もあり、関連の先行研究もある。報告では「声音韻譜」に窺える漢語音韻史に関わる特徴を整理し、併せて音韻学史的観点よりみた「声音韻譜」の韻図としての位置づけにも若干の言及を行いたい。

・太田斎（神戸市外国語大学）：名詞の変韻現象

代表的な孤立語とされる漢語にも非孤立語的要素はある。そのうち語幹音節と接辞の融合現象が形態変化と捉えられるようになったものとして、代表的なものが名詞に関する所謂「児化」である。北方方言においてはこれに類するものとして、「Z変」，“D変”と呼ばれるものがあるが、今回の発表では河南方言の例を中心に、山東方言や山西方言の例と比較して、その成立のプロセスについて、なお道半ばであるが、発表者自身のデータを交え、研究の現状を簡単に紹介したい。今回の発表は一昨年の本支部例会での発表（陝西省岐山方言のいわゆる「一部重ね型」語構成について）の続編のようなものだが、一部その訂正を含む。

・【講演】Zev Handel (University of Washington) : 历史比较法与层次分析法

目前越来越多的汉语方言学者认为传统的历史比较法 (comparative method) 并不一定能够很好地处理汉语方言音韵史上的各种问题, 而提出层次分析法弥补历史比较法的不足。其实, 层次分析法的目标和内容与历史比较法不完全相同。本文重申历史比较法的

目標和方法，进而协调它与层次分析法，使这两种方法结合起来更好地为汉语方言音韵史服务。主要内容有：历史比较法的目标和方法；历史比较法和高本汉；原始语和古代书面语；历史比较法和汉语方言音韵史；历史比较法和《切韵》音系。最后讨论如何协调这两种方法，提出一个新的研究程序。

◇2010年12月12日（日）同志社大学大阪サテライト

- ・下地早智子（神戸市外国語大学）：現代中国語における「シテイル／シテイタ」相当表現—日中のアスペクト対立にみられる視点と主観性—

現代中国語において、日本語の「継続相」には、一般に“V-着”“在V”“S呢”の諸形式、またはその組み合わせが対応すると認識される。しかしながら、度々指摘されるように、実際には無標識の動詞や“V-了”が対応する場合も少なくない。また、逆に“V-着”の日本語訳に「シテイル／シテイタ」などの「継続相」を用いることが出来ず、「スル／シタ」などの「完成相」を用いなければならない状況も存在する。本発表では、先行研究に従って中国語の上記諸形式の役割分担を再確認し、特に日本語の「継続相」と形式選択にずれが生じる場合の説明に力点を置きつつ、両言語のアスペクト対立の特徴について「視点」や「主観性」という観点から考察する。

- ・楊彩虹（プール学院大学）：中国語受身文とリアリティ

本研究では、中国語受身文の成立条件を分析し、一貫した解釈を試みた。まず、概念的な「素表現」に対して、現実世界に起こる個別的、具体的な事態を表現することを「リアリティ」と定義した。中国語受身文は「素表現」においては成立しないが、リアリティを持つ表現においては成立する。例えば、“了”、“着”を付加するものを現実世界に起こる個別的、具体的な事態であるとし、結果補語と様態補語は結果を具

体的に述べるものであり、「量的な限定」は具体的、個別的な行為像を描出する効果があると考えられる。さらに、受身文として成立しない概念的な事、抽象的な事、非現実的な事はリアリティを持たないためだという仮説を検証した。

#### 【ミニシンポジウム】

孤立的言語における語順のミステリー：（中日理論言語学研究会との共催）

- ・杉村博文（大阪大学）；加藤昌彦（大阪大学）；林範彦（神戸市外国語大学）

孤立的な言語の文法は基本的に語順によって支えられる。しかし、中国語には時々不規則な語順も観察されている。たとえば「下雨/雨停」「一鍋飯吃五個人/五個人吃一鍋飯」「張三家死了一条狗/張三家的狗死了」等々。それらの語順からどんな裏情報が読み取れるのだろうか。他の孤立語にはみられないのだろうか。ポー・カレン語、チノ語の専門家を迎えて、孤立語的言語の語順について考察する。

#### ◆中国支部例会

◇2010年7月25日（日）広島大学

- ・柯惟惟：1895年以來臺灣の語言政策轉變

臺灣位於亞洲東部，太平洋西北邊。從17世紀開始，陸續經歷荷蘭，西班牙，鄭成功，清朝，日本以及1945年後國民黨遷台等的政權統治。臺灣雖以現代北方漢語語法和北京話語音作為國語，但是在複雜的歷史背景之下，發展至今的國語已和中國所使用的「普通話」，無論是在語音或是詞彙上都有差異存在。本文將著重在彙整各種從日本統治時代至今，與語言相關的重要政策。希望可以藉由觀察語言政策的轉變，對臺灣國語的獨特性有更進一步的了解。

◇2010年10月3日(日) 広島大学

・楊明：中国語の動補構造における構文の存在-構文文法によるアプローチ-

本発表は、構文文法(Construction Grammar)の視点から、I 結果構文における使役の意味の所在、II 動補構造に結びつく独自の項構造、III 構成要素に対する意味制限という三つの現象を証拠として挙げて、動補構造はゲシュタルト的な性質を持っており、動補構造にみられる、特定の動詞クラスが特定の統語順序で配列されるという合成パターン[[V][RP]]c が慣習化された意味と形式の対応物、即ち、構文(Construction)であると主張する。

・侯仁鋒(県立広島大学)：対“中国語検定試験”的听力理解探討

【1】从试卷的内部一致性上分析信度：根据公布的考后数据，对比听力和笔试的平均分可知，64回(差0.2分)和68回(差2分)，在试卷的内部一致性上有很高的信度，而69回(差16分)，66回(差9.3分)和65回(差10.3分)则信度欠佳，67回(差4分)不尽理想。【2】从听力理解特点分析信度：我们对08, 09年的听力探讨的结果表明，大部分试题质量上乘，如语言地道，表达自然，设问合情合理，先给出设问后听题干等等，都保证了试题有良好的效度和信度。但另一方面，也发现了一些问题，这些问题也许有可能成为影响试题的效度和信度的因素。分别是：(1)文本失当，(2)试题篇幅过长，(3)没有提示必要的话题，情景或场面，(4)选择项过长，信息量过多，(5)设问和选择项不匹配，欠严谨。

◆九州支部例会

◇2010年7月10日(土) 長崎大学

・李孟娟(熊本大学・院)：日本語と中国語両言語の「態」に関する対照研究

日本語にも中国語にも受動表現と使役表現がある。日本語の場合、受動表現は「られ」、使役表現は「させ」を用い、区別される。それに対して中国語の「让」「叫」「给」は受動表現にも使役表現にも用いられる。これが両言語間でどのように対応し、或いは対応しないか、またどうした場合受動表現かどうした場合使役表現かを日本語及び中国語の文学作品とその対訳から成るコーパスを用いて考察する。そのみならず、また対応しない場合も本発表では明らかにする。

・王振宇(立命館アジア太平洋大学)：湘語蔡橋方言の“倒”

湘語蔡橋方言の“倒”は結果補語、アスペクト助詞などの用法を持っている。前者は“捡到一块钱”(捡到一块钱)、“买到一台电视”(买到一台电视机)などのようなものであり、「動作対象(“钱”、“电视”)の獲得」を表す。一方、後者はさらに“在屋里吃倒饭”(在家里吃着饭)のような「動作の持続」を表す“倒”と、“在床上困倒”(在床上睡着)のような「状態の持続」を表す“倒”に分けられる。本発表は動詞の語彙的な意味や前置詞句(「在」+場所名詞)の構文位置などに着目して“倒”の性質を考察する。

・郭楊(九州大学・院)：中国語の他動詞とその前のNP

本発表では、中国語の他動詞には、Caseを1つ付与するものと2つ付与するものがあると仮定することによって、他動詞の前のNPが主語になるか否かが決まると主張する。つまり、主語と目的語のNPに同時にCaseを付与する他動詞の前のNPは主語であり、目的語にしかCaseを付与しない他動詞の前のNPはTopicである。中国語のTopic構文は、Case filterに違反するように見える構文であるが、本発表の主張に基づけば、さらなる仮定を必要することなく、そのまま説明できる。本発表では、いくつかの構文を用いて、この仮定を説明する。

・翟勇（九州大学）：中国語再帰代名詞の処理について

中国語の再帰代名詞（自己，他／她自己）については，これまでに統語論・機能論・意味論と語用論の面から盛んに議論されてきた(Wang & Stillings 1984; Manzini & Wexler 1987; Chen 1992; Xu 1993,1994; Huang 1994, 2001; Pan 1995, 1997; Hu & Pan 2002)。しかし，統一的な見解は得られていない。Liu(2009)は，心理言語学の視点から中国語の再帰代名詞に統一的な解釈を与えようと試みた。しかしながら，実験の方法や実験文などに問題点がある。そこで，Liu(2009)と異なる妥当な実験課題で中国語再帰代名詞の実験を行う予定である。

◇2010年12月18日（土）沖縄大学

・郭楊（九州大学・院）：中国語の文末遊離数量詞

本発表は，「老师批评了不认真的学生三个（先生が叱ったのは不真面目な学生三人だ）」のような中国語の文末遊離数量詞文の構造を取り上げる。なぜ，この場合，文末遊離数量詞の係り先は目的語位置のNP「学生」に限られており，主語位置のNP「老师（先生）」には係れないのか，さらに，なぜ自動詞文や受身文になると，主語位置のNPでも係り先になれるのかなどの問題を，文末遊離数量詞の統語的分布と意味解釈の両面を考慮して，分析する。その結果，文末遊離数量詞の構文を観察することによって，動詞の左に生起する名詞句の構造的な位置が明らかになることがわかる。中国語の文構造がどのようなシステムで決定されているかを論じたい。

・王慶（九州大学・院）：中国語の dou（都）と焦点構造

黄(2004)では，dou（都）を話題位置にある意味焦点を量化するものであると特徴づけ，それによって，dou（都）がba（把）構文，bei（被）構文に生起して容認不可能になる場合を説明している。しかし，本発表

では，その分析では説明できない例文があることを指摘し，黄(2004)の分析に対して，dou（都）は，叙述関係の中核にあって，主題と述部を量関係で結ぶものと提案する。つまり，演算子はどちらか一方に焦点を当ててではなく，主述をつなげる役割を担うことになる。さらに，本提案を「还」，「也」，「只」などにも拡張して考察する

・イニッド（リイニッド）（沖縄国際大学）：広東語の人間名詞の数を表す助数詞について

中国語の助数詞とは，基本的に指示対象の永久的かつ本質的かつ知覚的な特徴に合わせなければならない。例えば，北京語や広東語で，魚を数えるときは「〇條魚」，ペンを数えるときは「〇支筆」と言わなければならない。「條」と「支」を自由に置き換えることは出来ない。従って，話者が助数詞を自由に選択する余地が殆どないというのが定説である。しかし，本論文では，人間名詞の数や類別を表す広東語助数詞の使い方を詳しく分析した結果，話者がある程度自由に助数詞を選択できること，指示対象の特徴は必ずしも永久的かつ本質的かつ知覚的なものではないこと，更に，話者の助数詞の選択に様々な情報が隠れていることが判明した。

・佐藤昭（北九州市立大学）：中古から現代までの中国語の音韻変化

音韻が時代とともに変化してゆく現象を音韻変化という。音韻変化には，(A) 体系的な音韻変化と (B) 個別的な音韻変化がある。(A) に関しては，(1) 二つの音韻が一つの音韻になる音韻統合と，(2) 一つの音韻が二つの音韻に分かれる音韻分化とがある（『日本語学研究事典』明治書院，「音韻変化」の項目より）。発表者はこの説明に拠りつつ，中古（7世紀）から現代（20世紀）までの時間を7つに区分し，中国語の主要な音韻変化がそれぞれどの時間に行なわれたかを音節単位で考察しようと試みるものである。従来中国語音韻変化の研究は，音

節を声母・韻母・声調の三つに分けてこの順で行なうのが通例であるが、一般の人にとって、このようなやり方は分かりにくいと思われる。

・王志英（沖縄大学）：中国語の“回”と“～回”の文構造とその意味について

本発表は中国語の動詞の“回”と方向補語の“～回”について、構文の特徴からその意味を考える。“回”と“～回”を使う時、移動する主体や対象、出発点か着点という

要素が不可欠である。また、“回”と“～回”の主体や対象の移動する軌道が360度から180度、往復から片道の移動という特徴を持っている。同一の物の移動を表す場合、360度の移動になるが、同一の物ではなく、同類の物なら、180度の移動が殆どである。“爸爸买回来一些水果”の“回来”は方向補語ではなく、動詞である。“爸爸买一些水果回来”という言い方に置き換えることができるからである。“爸爸”がもとの場所（家）に戻ってきたという意味を表す。

## 内規の改正と会則の改定のお知らせ

### ■内規の改正

2010年11月13日に神奈川大学で開催されました評議会におきまして、以下の内規改正案が承認されましたので、ご報告いたします。

#### 【改正内容】

#### 1 会長及び理事選出方法に関する内規 (第10条関連)

|     |                                                                         |
|-----|-------------------------------------------------------------------------|
| 改正前 | (3) 理事長、会長を務めた者は、 <u>次回以降の選挙で最高得票数を得ても会長に選出されることはなく、次点者が会長として選出される。</u> |
|-----|-------------------------------------------------------------------------|

↓

|     |                                                    |
|-----|----------------------------------------------------|
| 改正後 | (3) 理事長、会長を務めた者は、 <u>次回以降の選挙において、理事の被選挙権をもたない。</u> |
|-----|----------------------------------------------------|

#### 2 『中国語学』編集委員会に関する内規 (第15条、第16条関連)

|     |                                                                                                |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 改正前 | (2) 委員<br>ア 委員数は <u>6名</u> とする。<br>イ 委員長および委員の任期は <u>全国大会終了以後翌々年度大会終了までの2年とする。ただし、再任を妨げない。</u> |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------|

↓

|     |                                                                                                                                            |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 改正後 | (2) 委員<br>ア 委員数は <u>8名</u> とする。 <u>但し、うち1名は選出時に理事の職にある者をもって充てる。</u><br>イ 委員の任期は原則として、 <u>全国大会終了以後翌々年度大会終了までの2年とし、再任を妨げない。委員長の任期は2年とする。</u> |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

### ■会則の改定

2010年11月13日に神奈川大学で開催されました総会におきまして、以下の会則改定案が承認されましたので、ご報告いたします。

#### 【改定内容】 [付則] に業務委託先を記載

|     |                                               |
|-----|-----------------------------------------------|
| 改定前 | 1. 本会の事務局は、 <u>当面の間、会長の所属機関またはその所在地に設置する。</u> |
|-----|-----------------------------------------------|

↓

|     |                                                                                                   |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 改定後 | 1. 本会の事務局は、 <u>会長の所属機関またはその所在地に設置し、あわせて事務支局を中西印刷株式会社（〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル西大路町146番地）内に置く。</u> |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------|

## 会議報告

### ■大会運営委員会

委員：岩田礼（委員長）、石崎博志、今井敬子、岩本 真理、佐々木勲人、石汝杰、張勤、増野仁、松村文芳、望月圭子、山田眞一

#### I 2010年8月～10月の活動

\*7月までの活動については『中国語学』257, pp.203-204 を参照。

- (1) 8月中旬までに司会の依頼を完了し、神奈川県大学の準備会とともにプログラムを作成した。
- (2) 9月以降は、神奈川県大学の準備会がフル回転し、ポスター作成、予稿集作成・印刷、参加申込みに関する事務手続き、会場設定等を進めた。

#### II 「事務局・学会運営体制の見直し」に関する対応

9月21日に、会長から「来年度以降の事務局・学会運営体制の見直しについて」と題する理事会提案が委員会に提示された。この見直しによって全国大会開催校及び大会運営委員会が最も大きな影響を蒙ることを踏まえ、集中討議を行なった。その結果、9月30日付けで「大会運営委員会の見解と理事会に対する提案」と題する文書を会長に提出した。提案部分の骨子は下記の通り。

- (1) 現在、「大会助成費」によって開催校準備会に委ねられている諸経費※に関して、学会事務費からの支出とすること。  
※プログラム印刷費・郵送費、大会受付準備経費（参加者名簿、名札等作成費）、大会会場借上料、予稿集印刷経費等
  - (2) 赤字が出た開催校については、学会から不足分を補填すること。
- 以上二点は、開催校の負担軽減と大学間の

条件の違いを極力除去するための提案である。この措置によって、開催校の主な支出は、学生バイト料、招待講演者旅費・謝金及びその他雑費だけになる。

なお、「将来的に会費値上げが実施される場合」は、大会参加の事前登録制度を廃止し当日登録とすること、並びに大会参加費（現行1500円）の不徴収を検討するよう提案した。

その後、会長・事務局より、上記(1)の提案に基づいて新年度予算を編成すること、予稿集の売上金については、大会終了後、[一部当たりの印刷単価×売上部数]を開催校準備会から学会に納めること、ただし赤字が出た場合は状況に応じて勘案することが提案され、了承した。

### ■編集委員会

◆2010年度第3回（『中国語学』第257号）編集委員会

日時：2010年7月10日（土）、持ち回り会議

参加者：木津祐子（委員長）、太田齋、大西克也、小野秀樹、三宅登之、楊凱榮（以上委員）

#### 【議事】

1. 『中国語学』257号「要二次審査論文」の再審査及び採否決定

5月15日開催の第2回編集委員会にて「要二次審査」と判定された8篇の論文は、再提出期日の6月30日（水）までに全て修正論文が提出された。その修正原稿に基づき、編集委員会にて厳密に再審査を行い、2篇については修正要求を満たしていないことにより不採用、残る6篇を採用と決定した。

その結果、257号投稿論文は、30篇中6篇が採用と決定した。

◆2010年度第4回（『中国語学』257号）・2011年度第1回（同258号）合同編集委員会

日時：2010年11月14日（日）

場所：神奈川大学23号館305号室

出席者：木津祐子（委員長）、太田齋、大西克也、小野秀樹、三宅登之、楊凱榮（以上257号第4回）大西克也、三宅登之、楊凱榮、石村広、中川裕三、朱春躍、（欠席）中西裕樹（以上258号第1回）

【報告】

1. 『中国語学』257号刊行について  
『中国語学』257号が、11月13日付けで刊行された。
2. 編集委員会内規改正について  
編集委員会の委員数を、現行の6名から8名に増員する内規改正案が、理事会・評議会・総会において承認された。ただし、次期（258・259号）編集委員会は、今大会をもって退任する3名の現委員に対して、4名の新委員を迎える7人体制を取り、8名の委員会体制が完成するのは、2013年度（260号）委員会であることを説明し、併せて了承された。
3. 編集委員の交代について  
太田齋、小野秀樹、木津祐子3名が任期満了により退任、新委員として、石村広、中川裕三、中西裕樹、朱春躍の4名を選出した。
4. 投稿規程・執筆要領の記載内容の改訂について  
この問題については、新委員会に議論の継続を申し送った。  
（以上、257号第4回にかかわる報告事項）

【議事】

1. 新規委員長の選出について  
委員の互選により、大西克也委員を次期編集委員長に選出した。
2. 今後のスケジュールについて  
258号刊行に向けてのタイムスケジュールの概略が確認された。  
（以上、258号第1回にかかわる議事）

◆2011年度第1回（『中国語学』258号）編集委員会

日時：11月30日（火）

持ち回り会議参加者：大西克也（委員長）、三宅登之、楊凱榮、石村広、中川裕三、朱春躍、中西裕樹（以上委員） 陪席者：木津祐子（前委員長）

【議事】

1. 投稿規程・執筆要領の記載について  
投稿規程・執筆要領の記載内容が、日本語版（正文）・中国語版（HP）で記述上の齟齬が見られる点について、前委員会から申し送られた修正内容を議論し、それを承認・決定した。投稿規程・執筆要領は日本語版・中国語版ともに同一内容とし、HPでの情報掲載も統一する。なお、英語版の改訂については、引き続き対応を検討することとする。

■2010年度第2回理事会

日時：2010年11月12日（金）17時～19時

場所：神奈川大学 1号館3階301会議室

出席者：平田昌司（会長）、三宅登之（副会長）、荒川清秀、遠藤光暁、佐藤晴彦、古屋昭弘、依藤醇（以上理事）；岩田礼（大会運営委員長）、木津祐子（編集委員長）；山崎直樹（ウェブリソース委員長）；池田巧、緑川英樹（以上幹事） 欠席者：古川裕

■2010 年度評議会

日時：2010 年 11 月 13 日(土) 10 時～12 時  
 場所：神奈川大学 1 号館 3 階 308 会議室  
 出席者：構成員 48 名

■2010 年度総会

日時：2010 年 11 月 13 日(土) 17 時～18 時  
 場所：神奈川大学 16 号館 2F セレストホール

【議長選出】

議長に佐藤富士雄氏（中央大学）と玄幸子氏（関西大学）を選出した。

【報告事項】

1. 一般報告

1.1 会員動向（10 月 1 日現在）

・会員数：

|            |       |        | 増減  |
|------------|-------|--------|-----|
| 総会員数（賛助除く） |       | 1189 名 | +30 |
| (内訳)       | 顧問    | 6 名    | ±0  |
|            | 名誉会員  | 25 名   | -4  |
|            | 通常会員  | 1120 名 | +23 |
|            | (ネット) | 249 名  |     |
|            | 海外会員  | 70 名   | +11 |
| 賛助会員       |       | 28 社   | ±0  |

※増減は昨年 11 月 16 日を基準とした数。

・会員動向：2009 年 10 月 1 日以降，除籍者 25 名；逝去 7 名（安藤彦太郎，伊藤漱平 [名誉会員]，長田夏樹 [名誉会員]，星野享司，本多浄道，望月真澄，吉田鐵也の各位）

1.2 支部例会関連

『中国語学』257 号「彙報」を参照。

2. 編集委員会報告

- 『中国語学』257 号が，11 月 13 日付で刊行された。投稿論文決定の経緯については，257 号 p. 200 から p. 201 を参照のこと。
- 近年，執筆要領に違反する論文が増加している。投稿に際しては，学会 HP 等に公開

されている投稿規程・執筆要領を熟読し，定められた形式を遵守した上で投稿するよう，重ねて注意を喚起する。

- 今年度学会奨励賞候補論文 2 篇を決定し，理事会で承認された。

3. ウェブリソース委員会報告

- メールマガジンについて
  - 毎月 1 回発行している。
- 論文検索システムについて
  - サーバーの不具合，仕様変更の検討などの理由により，データ登録作業が遅れている。
- 支部例会情報について
  - 例会を開いているどの支部も開催情報とともに発表要旨も事前に掲載している。全国の会員に利用してほしい。
- JST（独立行政法人科学技術振興機構）による『中国語学』デジタル化作業の進捗状況について
  - 底本が手に入る巻号については，すべてデジタル化および公開作業が進行中である。
  - 底本が見つからないのは，『中国語学研究会(関西)月報』2, 3 号の 2 冊である。

4. 大会運営委員会報告

- 60 回大会準備状況を報告するとともに，105 件の応募から口頭発表 59 件（のちに 2 件辞退），ポスター発表 7 件を採択した経緯，選考方法を報告した。
- 「事務局・学会運営体制の見直し」に関する委員会の対応状況を報告した（“会議報告”参照）。
- 分科会発表に関する若干の問題点について報告した（“大会総括”参照）。

5. 役員・委員等の異動について

来年度からの新規大会運営委員を遠藤雅裕（中央大），竹越孝（神戸市外国語大），三木夏華（鹿児島大）の各氏に委嘱。岩田礼委

員長（金沢大），および石崎博志（琉球大），今井敬子（静岡大），松村文芳（神奈川大）の各委員は今年度大会後，任期満了により退任。

#### 6. 次期大会開催校の決定

松山大学（愛媛県松山市），2011年10月29日（土）30日（日）。

#### 7. 名簿の発行について

2010年度版会員名簿を発行した。

#### 8. その他

大学評価・学位授与機構からの機関別認証評価委員会専門委員候補者の推薦依頼があり，扱いを会長・副会長に一任。

#### **【審議事項】**

##### 1. 理事の選出方法について

会長および理事の選出方法の問題点について平田会長より説明があり，改正案が示され，原案どおり承認された。詳細は本号「内規の改正と会則の改定のお知らせ」（p.11）を参照。

##### 2. 編集委員会に関する内規の改正について

編集委員会の構成と委員の任期について，平田会長より改正の説明と提案があり，原案どおり承認された。詳細は本号「内規の改正と会則の改定のお知らせ」（p.11）を参照。承認後，増員に伴い来年度からの編集委員を石村広（二松学舎大），中川裕三（天理大），中西裕樹（同志社大），朱春躍（神戸大）の各氏に新規委嘱し，太田齋（神戸市外国語大），小野秀樹（東京大），木津祐子（京都大）の3名が任期満了により退任することが報告された。

##### 3. 学会業務委託先の変更について

平田会長より学会業務の委託先を2011年度から中西印刷株式会社に変更する旨の提案と説明があり，原案どおりに承認された。

#### 4. 予算案・決算案

4.1 2009年度会計決算案（次頁以降を参照）  
澤田前幹事による報告・説明，及び中川会計監査による会計監査報告があり，報告のとおり承認された。

4.2 2010年度会計補正予算案（同上）

緑川幹事による提案・説明があり，原案のとおり承認された。

4.3 2011年度会計予算案（同上）

緑川幹事による提案・説明があり，原案のとおり承認された。

#### 5. 会則の改定について

平田会長より，業務委託先の変更にともない，事務手続きの必要から会則の附則に事務支局として委託先の住所の記載が必要になる旨の説明があり，会則の改定が承認された。詳細は本号「内規の改正と会則の改定のお知らせ」（p.11）を参照。

#### 6. 顧問・名誉会員の推挙について

名誉会員に平井勝利会員が推挙され，承認された。顧問の推挙はなかった。

#### 7. その他

5.1 学会創立70周年記念事業について

1946年発足の中国語学研究会から数えて70周年になる2016年に向けて相応しい記念事業を計画したい旨の提案があり，その具体的な内容について検討していくことになった。

5.2 学術研究団体としての姿勢について

本学会は学術研究団体であり，会員の研究活動の場として相応しい組織体として維持していくべきことを確認した。

## 日本中国語学会 2009 年度会計決算書 (2009 年 4 月～2010 年 3 月) (単位:円)

|                   | 2010 年 11 月 13 日総会承認 |            |
|-------------------|----------------------|------------|
|                   | 予算                   | 決算         |
| <収入>              |                      |            |
| 前年度繰越金            | 4,276,133            | 4,276,133  |
| 積立金               | 3,000,000            | 3,000,000  |
| 通常会員・海外会員会費収入     | 6,000,000            | 5,998,680  |
| 賛助会員会費収入          | 600,000              | 716,500    |
| 『中国語学』売上金         | 369,694              | 369,694    |
| 印税(著作権使用料)        | 49,000               | 58,000     |
| 通常貯金利子(09/4～10/3) |                      | 501        |
| 計                 | 14,294,827           | 14,419,508 |
| <支出>              |                      |            |
| 会誌印刷費             | 2,200,000            | 2,150,715  |
| 大会助成費             | 950,000              | 950,000    |
| 支部活動助成費           | 600,000              | 456,319    |
| 通信費               | 650,000              | 397,715    |
| 事務費               | 1,050,000            | 907,123    |
| 事務局費              | 650,000              | 650,000    |
| 編集局費              | 120,000              | 120,000    |
| ウェブ・リソース委員会経費     | 120,000              | 120,000    |
| ホームページ関連経費        | 180,000              | 0          |
| 大会運営委員会経費         | 120,000              | 120,000    |
| 旅費交通費             | 900,000              | 751,000    |
| 会議費等雑費            | 180,000              | 223,381    |
| 学会奨励賞             | 100,000              | 100,000    |
| 選挙関連費             | 100,000              | 26,250     |
| 積立金 [内訳は下記]       | 3,000,000            | 3,000,000  |
| 記念大会積立金(50 万)     |                      |            |
| 事務委託関係積立金(150 万)  |                      |            |
| ウェブサイト構築積立金(50 万) |                      |            |
| 国際会議開催支援積立金(50 万) |                      |            |
| 予備費               | 3,374,827            | 4,447,005  |
| 計                 | 14,294,827           | 14,419,508 |

監査の結果、経理内容は適正であり、経理諸表は適確に処理されていることを認めます。

2010年7月17日

2009年度会計監査 西川和夫

2009年度会計監査 中川裕三

日本中国語学会 2010年度会計補正予算案（2010年4月～2011年3月）（単位：円）

2010年11月13日総会承認

| ＜収入＞              |            | ＜支出＞              |            |
|-------------------|------------|-------------------|------------|
| 前年度繰越金            | 4,447,005  | 会誌印刷費             | 2,800,000  |
| (通常貯金利子約1300円を含む) |            | 大会助成費             | 1,310,000  |
| 積立金               | 3,000,000  | 支部活動助成費           | 600,000    |
| 通常会員会費収入          | 6,000,000  | 通信費               | 550,000    |
| 賛助会員会費収入          | 600,000    | 事務費               | 950,000    |
| 『中国語学』売上金         | 429,724    | 事務局費              | 650,000    |
|                   |            | 編集委員会経費           | 120,000    |
| 印税                | 24,000     | ウェブ・リソース委員会経費     | 120,000    |
| 計                 | 14,500,729 | ホームページ関連経費        | 0          |
|                   |            | 大会運営委員会経費         | 220,000    |
|                   |            | 旅費交通費             | 900,000    |
|                   |            | 会議費等雑費            | 180,000    |
|                   |            | 学会奨励賞             | 100,000    |
|                   |            | 事務局移転初期費用         | 120,000    |
|                   |            | 名簿印刷費             | 600,000    |
|                   |            | 積立金               | 2,640,000  |
|                   |            | [内訳]              |            |
|                   |            | 記念大会積立金(14万)      |            |
|                   |            | 事務委託関係積立金(150万)   |            |
|                   |            | ウェブサイト構築等積立金(50万) |            |
|                   |            | 国際会議開催支援積立金(50万)  |            |
|                   |            | 予備費               | 2,640,729  |
|                   |            | 計                 | 14,500,729 |

日本中国語学会 2011 年度会計予算案 (2011 年 4 月～2012 年 3 月) (単位:円)

2010 年 11 月 13 日総会承認

|           |            |                    |            |
|-----------|------------|--------------------|------------|
| <収入>      |            | <支出>               |            |
| 前年度繰越金    | 2,640,729  | 会誌印刷費              | 2,800,000  |
| 積立からの繰入金  | 2,320,000  | 予稿集印刷費             | 500,000    |
| 通常会員会費収入  | 6,000,000  | 大会助成費              | 300,000    |
| 賛助会員会費収入  | 600,000    | 支部活動助成費            | 550,000    |
| 『中国語学』売上金 | 350,000    | 通信費                | 550,000    |
| 予稿集売上金    | 450,000    | 事務費                | 1,800,000  |
| <hr/>     |            | 大会事務費              | 800,000    |
| 計         | 12,360,729 | 事務局費               | 250,000    |
|           |            | 編集委員会経費            | 120,000    |
|           |            | ウェブ・リソース委員会経費      | 120,000    |
|           |            | ホームページ関連経費         | 180,000    |
|           |            | 大会運営委員会経費          | 220,000    |
|           |            | 旅費交通費              | 750,000    |
|           |            | 会議費等雑費             | 180,000    |
|           |            | 学会奨励賞              | 100,000    |
|           |            | 選挙関連費              | 100,000    |
|           |            | 積立金                | 2,360,000  |
|           |            | [内訳]               |            |
|           |            | 記念大会積立金(18 万)      |            |
|           |            | 事務委託関係積立金(118 万)   |            |
|           |            | ウェブサイト構築等積立金(50 万) |            |
|           |            | 国際会議開催支援積立金(50 万)  |            |
|           |            | 予備費                | 680,729    |
|           |            | <hr/>              |            |
|           |            | 計                  | 12,360,729 |

## 例会および全国大会開催のお知らせ

### 今年度の例会実施予定

各支部の今後の例会実施予定は次のようになっております。

北海道支部：3月19日（土）

関東支部：3月19日（土）[拡大]

北陸支部：2月（予定）

最近支部を越えた活動もますます多くなってきているように思います。発表者、参会者ともに歓迎いたします。ただし、開催時期および回数は変更になることもございますので、ご了承下さい。

発表者の方には発表要旨（300字以内）の事前提出をお願いしておりますので、よろしくお願いたします。この要旨は本会ウェブサ

イト上の例会案内のページでご紹介するとともに、年に2回発行しておりますニューズレターにも掲載しております。

なお、開催に関する詳細ならびに研究発表の募集などにつきましては、学会ウェブサイト参照のうえ、各支部例会担当者までお問い合わせ下さい。

（事務局）

### 第61回全国大会開催のお知らせ

日本中国語学会第61回全国大会は2011年10月29日（土）30日（日）の両日、松山大学にて開催されます。松山大学は近くに有名な道後温泉があり、『坂の上の雲』の主人公の出身地としてもよく知られた街です。どうぞふるっ

てご参加ください。詳細は近日中にウェブサイトに掲載の予定で、また2011年5月末頃に改めてご案内をお送りする予定です。

（事務局）

## 事務局からのお知らせ

### ■『中国語学』デジタル化底本提供のお願い

総会報告の欄にもありますように、ウェブリソース委員会ではJST（独立行政法人科学技術振興機構）による『中国語学』バックナンバーのデジタル化作業を進めておりますが、底本が見つからず欠号が生じています。もし以下の号をお持ちでしたら、底本としてご提供いただけると助かります。

欠号：『中国語学研究会（関西）月報』2号および3号（1950年）

#### 【2号】

田中謙二 徐嘉瑞「金元戯曲方言考」評

倉石武四郎 日本中国学会はどうしてできたか

#### 【3号】

長田夏樹 上古中国語音韻体系瑣説

お持ちのかたは事務局までお知らせください。

■ 2010 年度会費納入のお願い

会費未納の方には、振込用紙を同封しております。本年度会費（一般会員6,000円，ネット会員5,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。事務処理上、2010年12月31日までにご入金くださるよう御協力をお願い致します。

郵便振替 加入者名：日本中国語学会  
口座番号：00120-2-536256

■ 顧問・名誉会員の推挙

顧問・名誉会員のご推挙は、推薦文を添えて2011年9月30日までに事務局宛にお願いいたします。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は好文出版にてお求めになれます。第53，55回は1,500円，第56-60回は2,000円となっております。詳しくは学会ウェブサイトをご覧ください。

（好文出版：order@kohbun.co.jp）

■ 会費未納による除籍者（「会費納入に関する内規」による）

□□□□□，□□ □□，□□ □，□ □□，  
□ □，□□ □□，□ □□，□□ □□，□  
□，□ □，□ □□，□□ □，□ □□，□  
□ □□，□ □□，□□ □，□ □，□ □  
□，□□ □□，□ □，□ □□，□□ □□，  
□ □，□□ □□，□□ □，□□□□□

（以上 26 名）

■ 住所変更届をご提出ください

会員登録の確認や支部例会の案内などの郵便物が何通か返送されて来ています。住所や勤務先が変わられましたら、事務局あてに連絡先住所の変更届をご提出ください。

■ 事務局からのお詫び

評議会にご出席いただくみなさまに、大会のプログラムをいったん発表した後で、評議会の開始時刻を10時30分から10時にくりあげて修正したご案内をお送りしました。そのため、先生がたにご迷惑をおかけいたしました。連絡の不手際をお詫び申し上げます。

■ 事務局の連絡先

事務局への郵便物は、  
〒606-8501

京都市左京区吉田本町  
京都大学人文科学研究所 池田巧研究室内  
日本中国語学会事務局宛

が届きます。また各種お問い合わせは、学会ウェブサイト（<http://www.chilin.jp/>）内の「お問い合わせ」ページをご利用ください。

事務局の本部所在地と郵便物などの連絡先住所が異なりますので、ご注意ください。

## 『中国語学』投稿規程（2009年7月改訂）

変更なし

## 『中国語学』執筆要領（2010年11月改訂）

（言語指定）

## 1. 使用言語

- ◇ 投稿原稿の使用言語は、日本語、中国語、英語のいずれかとする。
- ◇ 本文、タイトル、サマリー、引用例の訳文に用いる言語は、それぞれ次のように定める。本文が日本語の場合、A、Bのいずれかを選択する。執筆者の母語以外で書いた部分については、信頼できる母語話者の校閲を経たものでなければならない。

| 本文         | タイトル・執筆者氏名             | サマリー・キーワード                                 | 本文とは異なる言語の引用例の訳文 |
|------------|------------------------|--------------------------------------------|------------------|
| 日本語<br>(A) | 日本語・中国語・英語（3言語）<br>[注] | 論文冒頭に日本語のサマリー・キーワード<br>論文末尾に中国語のサマリー・キーワード | 日本語              |
| 日本語<br>(B) | 日本語・英語（2言語）            | 論文冒頭に日本語のサマリー・キーワード<br>論文末尾に英語のサマリー・キーワード  | 日本語              |
| 中国語        | 中国語・英語（2言語）            | 論文冒頭に中国語のサマリー・キーワード<br>論文末尾に英語のサマリー・キーワード  | 中国語              |
| 英語         | 英語・中国語（2言語）            | 論文冒頭に英語のサマリー・キーワード<br>論文末尾に中国語のサマリー・キーワード  | 英語               |

[注] 英語のタイトルと執筆者氏名は、『中国語学』英文目次に掲載します。

◇日本語、中国語をローマ字化する場合は、日本語はヘボン式（長母音は ei 以外は字母をかさねる）、中国語はピンインを原則とする。その他の非アルファベット系字母は特別な必要がない限りローマ字転写する。

## 2. 投稿原稿の構成

◇投稿原稿は「表紙」と「論文本体」からなる。

◇提出の際は、表紙つきの原稿を1部、表紙なしの原稿を4部、合計5部を提出する。

### 2-1. 本文が日本語の場合、次のA、Bのうち一方を選択。

#### A（サマリー・キーワードが中国語の場合）

(1) 表紙（1枚、ページ番号はつけない）

1. 原稿の種別（研究論文、資料）
2. 論文タイトル（日本語・中国語・英語）（3言語）
3. 執筆者氏名（日本語・中国語・英語）（3言語）
4. 所属機関（ない場合は「なし」と明記）
5. 連絡先（住所、郵便番号、電話番号、電子メールアドレスを明記）。〔共著論文の場合は全員について記載する。〕

(2) 論文本体（17枚以内、ページ番号をつける）（執筆者名、所属機関名など、執筆者を特定し得る事項は書かないこと）

1. 日本語の論文タイトル
2. 日本語のサマリー（400字以内）、キーワード（3個以上5個まで）
3. 本文
4. 注
5. 参照文献一覧
6. 中国語の論文タイトル、サマリー（300字以内）、キーワード（5語以内）

#### B（サマリー・キーワードが英語の場合）

(1) 表紙（1枚、ページ番号はつけない）

1. 原稿の種別（研究論文、資料）
2. 論文タイトル（日本語・英語）（2言語）
3. 執筆者氏名（日本語・英語）（2言語）
4. 所属機関（ない場合は「なし」と明記）
5. 連絡先（住所、郵便番号、電話番号、電子メールアドレスを明記）。〔共著論文の場合は全員について記載する。〕

(2) 論文本体（17枚以内、ページ番号をつける）（執筆者名、所属機関名など、執筆者を特定し得る事項は書かないこと）

1. 日本語の論文タイトル
2. 日本語のサマリー（400字以内）、キーワード（3個以上5個まで）

3. 本文
4. 注
5. 参照文献一覧
6. 英語の論文タイトル, サマリー (100語以内), キーワード (5語以内)

## 2-2. 本文が中国語の場合

- (1) 表紙 (1枚, ページ番号はつけない)
  1. 原稿の種別 (研究論文, 資料)
  2. 論文タイトル (中国語・英語) (2言語)
  3. 執筆者氏名 (中国語・英語) (2言語)
  4. 所属機関 (ない場合は「なし」と明記)
  5. 連絡先 (住所, 郵便番号, 電話番号, 電子メールアドレスを明記)。[共著論文の場合は全員について記載する。]
- (2) 論文本体 (17枚以内, ページ番号をつける) (執筆者名, 所属機関名など, 執筆者を特定し得る事項は書かないこと)
  1. 中国語の論文タイトル
  2. 中国語のサマリー (300字以内), キーワード (3個以上5個まで)
  3. 本文
  4. 注
  5. 参照文献一覧
  6. 英語の論文タイトル, サマリー (100語以内), キーワード (5語以内)

## 2-3. 本文が英語の場合

- (1) 表紙 (1枚, ページ番号はつけない)
  1. 原稿の種別 (研究論文, 資料)
  2. 論文タイトル (英語・中国語) (2言語)
  3. 執筆者氏名 (英語・中国語) (2言語)
  4. 所属機関 (ない場合は「なし」と明記)
  5. 連絡先 (住所, 郵便番号, 電話番号, 電子メールアドレスを明記)。[共著論文の場合は全員について記載する。]
- (2) 論文本体 (17枚以内, ページ番号をつける) (執筆者名, 所属機関名など, 執筆者を特定し得る事項は書かないこと)
  1. 英語の論文タイトル
  2. 英語のサマリー (100語以内), キーワード (3個以上5個まで)
  3. 本文
  4. 注
  5. 参照文献一覧
  6. 中国語の論文タイトル, サマリー (300字以内), キーワード (5語以内)

### 3. 論文本体の書式と分量

◇論文本体は次の書式で執筆する。

\* A4 判用紙を用い、上下左右の余白を 30mm 分とする。

\* 1 ページは 40 字×30 行とする。

\* 論文タイトル、サマリー、キーワード、本文、注、参照文献一覧のすべてについて、文字の大きさと行間は同じとする。(注や参照文献一覧で文字の大きさを小さくしたり、行間をつめたりしない。)

\* 本文中の注番号のみ、1 字分の肩に半カッコを付して「③」のようにつける。

◇論文本体は、上記の書式でプリントアウトして 17 ページ以内となるようにする。

◇図表のある場合は、できあがりの紙面が A5 判となることを考慮した上で大きさを指定し、それを含めて 17 ページ以内におさまるようにする。

### 4. 注意事項

- (1) 表紙にはページ番号をつけない。論文本体には紙面下中央にページ番号をつける。
- (2) 投稿時には謝辞のたぐいを書いてはならない。(謝辞は印刷初校段階において、執筆要領に示す制限枚数の許す範囲内で加えてよい。)
- (3) 同一著者による同一年の論著は、「潘悟云 2001a」, 「潘悟云 2001b」のように区別する。
- (4) 本文や注の中で参照文献に言及するときは、「太田 1958 : 21-25」のようにページまで指示する。参照文献の著者が中国人・韓国人である場合は姓名を記し、他は特別な場合を除き姓のみを記す。同姓の著者は名まで記し、欧文の場合は、ファーストネームのイニシャルで W. Simon, H. Simon のように区別する。
- (5) 原稿の種別を問わず、注は半角アラビア数字を用いて通し番号とする。
- (6) 参照文献は、本文または注において引用・言及されたもののみを日本語文献、中国語文献、欧文文献にグルーピングし、下記の体裁に準じてアルファベット順に記載する。

平山久雄 2000. 「給」の来源——「過与」説に寄せて」, 『中国語学』247: 56-70 頁。

太田辰夫 1958. 『中国語歴史文法』。東京: 江南書院。

方经民 2003. 「现代汉语空间方位参照系统认知研究」, 博士学位论文, 中国: 上海师范大学。

吕叔湘 1992. 「理论研究和用法研究」, 中国语文杂志社编『语法研究和探索(六)』: 1-3 页。北京: 语文出版社。

潘悟云 2001. 「反切行为与反切原则」, 『中国语文』2001 年第 1 期: 99-111 页。

Hashimoto, Mantaro. 1986. The Altaicization of Northern Chinese. In John McCoy and Timothy Light (eds.), *Contributions to Sino-Tibetan Studies* (Cornell Linguistics Contributions). Leiden: E. J. Brill. 76-97.

Norman, Jerry. 1988. *Chinese*. Cambridge: Cambridge University Press.

Postal, Paul. 1970. On the Surface Verb "remind". *Linguistic Inquiry* 1: 37-120.

Sag, Ivan. 1976. Deletion and Logical Form. Ph.D. diss., MIT, Cambridge, Massachusetts.

## 5. 引用例の出典

- ◇現代語文献からの引用例は，出典を明記する。（論証のキーとなる用例にはページも明記するのが望ましい。）
- ◇史的文献からの引用例には，出典，版本，ページを必ず明記する。
- ◇筆者の母語以外の言語による作例は，信頼できる母語話者の校閲を経たものでなければならない。
- ◇文番号および括弧には半角を使用する。

## 6. 引用例の訳文

- ◇日本語以外の言語の引用例には，日本語訳を付す。文学作品等から引用された用例で長いものは，論証に不可欠と思われる箇所の下線を引き，その箇所の日本語訳のみを付す。

## 訃報

### 名誉会員の逝去について

**伊藤漱平**（いとう そうへい）名誉会員 1925年，愛知県に生れる。2009年12月21日逝去。島根大学・大阪市立大学・北海道大学・東京大学・二松学舎大学に勤務。中国語学研究会，中国語学会において関東支部理事などの役職をつとめられた。著書に『紅樓夢』全訳，『伊藤漱平著作集』全5巻ほか。

**長田夏樹**（おさだ なつき）名誉会員 1920年，鎌倉に生れる。2010年1月12日逝去。神戸市外国語大学・神田外国語大学等に勤務。中国語学研究会，中国語学会において常任理事・編集委員・関東支部理事などの役職をつとめられた。著書に『長田夏樹論述集』上下巻ほか。

ここに会員各位にお知らせするとともに，永年にわたって本会ならびに斯学の発展に寄与された先生の多大な功績とご尽力に感謝し，心からご冥福をお祈り申し上げます。

平成22年12月

日本中国語学会会長 平田昌司

日本中国語学会々報 2010年秋季

(年二回発行)

発行者：日本中国語学会事務局

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学研究科中国語学中国文学研究室内

E-mail: jimukyoku.10-12@chilin.jp

URL: <http://www.chilin.jp/>

発行日：2010年12月15日